

花鳥風月

関西大学 社会安全学部 小澤 守

春先には筆者の自宅の近くのとおりではこぶしの花が開き、今年は4月初めにソメイヨシノが、次いで近くの公園ではハナミズキ、そして今、まさにツツジが咲き乱れている。日本人のみならず海外においても多くの人は花が好きで、すでに40年近く前に滞在していたドイツではもう少し先の5月ごろになると、ある日、突然チューリップが咲き乱れた。というよりある日に大量の咲いたチューリップを植えたためと分かったのはあとのこと。花屋と違って温室外で咲く花は季節の訪れを感じさせてくれる便りなのだろう。

ハナミズキの下で花見酒は見たことがないが、先立つソメイヨシノの満開時には、どこもかしこも花見に賑わっている。夙川堤は言うに及ばず神戸市内でも多くの花見客でにぎわったことだろう。

花見の歴史には疎いが、長屋の花見などといった落語があるくらいだから、花見は昔から春の訪れを待つ人たちの楽しみであったのだろう。当然ながら花見酒という言葉があるくらいだから、きっと花見は酒とセットになっている。酒も適度に楽しむ分には話が弾み、新入社員が先輩方と親しくなる絶好の機会でもあった。しかしその酒が不適切な場で飲めば、飲酒運転などにもつながる厄介な状態にもなりうる。かつては風船を膨らますといった飲酒検知が行われていたが、最近では高性能のアルコール検知センサーが導入されたために、車を運転する際にはたとえごく僅かであってもうっかり酒を飲むわけにもいかないのである。もちろん酩酊運転などもってのほかであるのは言うまでもない。

最近、何度か新聞やTVのニュースに出現したのは、航空機のパイロットが搭乗前に逮捕されたとか、事前検査でアルコールが検出され、交代要員の手配などで出発が遅れたとかといった話題である。航空機のパイロットは多数の旅客の命を預かる重要な職種であるのは言うまでもない。乗務と乗務の間のつかの間の休憩時に少くとも飲んで、という気持ちも分からないわけではないが、何も飲んでいなくても心身の状態によっては大きな事故に至った事故もあったのであるから、ましてやアルコールが集中力や判断を狂わす（だからこそ酒を飲むのであるが）ことが明らかであるのであるから、いったん勤務期間に入ったら、一切酒を断って、勤務に集中しなければならないのは、当たり前といえば当たり前。どうしても酒を飲みたいのなら、勤務形態にも依存するが、飲めるときに飲めばいい。検出されるのが分かっているのにどうして酒を制限時間内に飲むのはなぜか。

パイロットがパイロットとして社会的に認知されるその一方で、パイロットには社会的責任が伴うのである。どうも本人の意志だけでパイロットになったように思っておられるのだろう。酒を飲むのも自由だが、その一方で全く社会から孤立しているわけではないことから、各個人には社会的責任が伴うのである。古い職業観と思われるかもしれないが、その昔から航空機のパイロットは時代のエリートで、空軍では士官であったし、士官としての矜持があった。時代は変わっても数百人の命をその一手に預かっているプライドをわすれて

はいけない. どうしても飲みたいのなら, 上方落語よろしく貧乏花見よろしく, 沢庵や番茶で過ごしてはいかがだろうか.